(3) 保健大学地域統合実習受け入れを効果的に活用した地区把握と地域開発

①浜田地域：地区診断後、浜田わくわく倶楽部を組織化。活動始動を支援

(4) 地区診断・地域開発の推進

①戸山地域：地区診断後、活動母体の組織化。戸山地域の活動始動を支援

②三内地域：地区診断後、活動母体の組織化、三内地域の活動始動を支援

(5) 健康をつくるまちづくり実践セミナーによる市内全域への啓発

実践市民から市民へ、市民と市民・地域と地域の経験が交流できる仕組みを形成。

V．考察

ヘルスプロモーションは、保健師が地域介入の目的を明確に持つことにより、多様な切り口から波及を図ることができる。また、地域を質的・量的に把握する地区診断とコミュニティレポートの作成を活動準備のための重要な活動と位置づけた事により、活動母体の組織化と活動の初動を促進し、ヘルスプモーションの市内波及を可能とした。青森ヘルスプロモーションの市内波及の鍵は、地域を基盤に据えた保健師の活動体制の強化と、保健師の地区診断に基づく地域開発の力を高めていくことにある。

VI．引用文献

1）三上公子：青森ヘルスプロモーションの挑戦、公衆衛生 Vol166. No8, 2002年8月, 556－55

口述8

青森ヘルスプロモーションの市内波及（2）～“健康をつくるまちづくり”の波及を図る新たなコミュニティへの保健師の介入～

○小形　麻理[1)]　鈴木久美子[1)]　田中　牧子[1)]

1）青森市健康づくり推進課

Key Words：①やっていけそう感　②地区把握・地区診断　③地域特性の実感

I．はじめに

青森市には、ヘルスプロモーションの実践において、「青森ヘルスプロモーション第1期」の経験と、実践しなければわからなかった実践理論が数多く蓄積されている。ヘルスプロモーションの市内波及を進める上で、これら実践マニュアルともいえる活動の軌跡は心強いものではあるが、自身が実践を進めていかない限りは、ヘルスプロモーションの市内波及を図ることはできないという現実はどの保健師も自覚している。

青森市では、「青森ヘルスプロモーションの市内波及（1）」の報告にあるとおり、青森ヘルスプロモーションの第Ⅱ期において、「地区把握･地区診断→コミュニティレポートの作成・報告」を活動準備段階の重要な活動と位置づけることで、ヘルスプロモーションの活動始動と活動波及を可能としている。新たな地域においてヘルスプロモーション活動始動をおこすに至った保健師の地域介入のプロセスを明らかにすることによって、今後のヘルスプロモーション波及の促進に役立てたい。

II．目的

保健師は担当地域において、どのようなプロセスを踏んで新たな地域でのヘルスプロモーション活動を始動させたか明らかにする。

III．研究方法

青森ヘルスプロモーション第Ⅱ期において、ほぼ同時期に新たな地域への介入をスタートした3地域の保健師の地域活動記録と平成15年度活動反省ミーティングの内容から、市民主体のヘルスプロモーション活動始動に至るプロセスを明らかにする。

IV．結果

(1) ステップ1：保健師活動の経験に基づく介入地域の決定

これまでの保健事業を通じて知り得た地域の人材や地域の様相から、“この地域ならやっていけそう”という地域を介入地域として焦点をあてた。

(2) ステップ2：地域へのインフォメーション～自分の言葉で唱導する

ヘルスプロモーション活動の準備段階にあたる地区診断を進める上で、地域内の町会長に対し、地域情報把握のために地域へ入ることへの了解と、何のためにこの地域で健康をつくるまちづくりを進めるかを自分の言葉で伝え歩いた。

(3) ステップ3：地域特性を捉える地区把握・地区診断

地区診断に関する事前学習や、保健大学地域統合実習受け入れを効果的に活用した地区把握のプロセスを活かし、地域の質的情報把握のためのインタビューを地域保健活動グループメンバーで実施。インタビュー結果については、メンバー間で分析を進め、地域の量的データの収集・整理は同時進行で担

当保健師が行なった。

(4) ステップ4：コミュニティレポートによって地域を市民と共有

地区把握・地区診断結果をコミュニティレポートとして地域へ提供することにより、地域特性を市民とともに共有した。この参集には、地域の町会長やインタビュー協力者はもとより、小学校長、郵便局、地元医師、地元企業等、できるだけ地域の多様な資源へ声をかけ、活動母体となるメンバー募集についても周知を図った。

(5) ステップ5："健康をつくるまちづくり"メンバーの募集

コミュニティレポート報告会終了後1ヶ月以内のうちに、メンバー募集案内を地域の町会回覧を通じて実施。地区把握インタビューの過程で、この人にはメンバーにぜひ加わってほしいと感じた人には、保健師が直接アプローチした。

(6) ステップ6：活動組織の形成～メンバーの第1回顔合わせ会の開催

メンバーの応募動機の中に秘められた熱い思いを共有。この初回顔合わせで、今後のミーティングを定例化し曜日設定することをメンバー同意のもとで決定。

(7) ステップ7："健康をつくるまちづくり"通信で進捗状況を共有

第1回初顔合わせから、開催状況や話し合われた内容をまとめた通信を作成し、未参加の人も含め毎回メンバーに発行し、進捗状況の共有を図った。

(8) ステップ8：一旦ふるいをかけてメンバーの意思を確認

初回顔合わせのみで、以降のミーティングには参加しない・あるいは参加回数が極めて少ないメンバーに対しても通信を出しつづけることへの疑問から、いったんメンバーへ今後の参加意志を確認し、参加意志のある者の絞込みを行なった。

(9) ステップ9：保健師間の地域情報の交換とアドバイザーへの相談

活動進度がほぼ同じ保健師同士で地域の情報を交換することで、介入地域の特性をより実感し、地域をみて、地域の市民と共に活動するという意志を明確化できた。また、市民との真剣な対話の中で気づかされたファシリテーターとしての課題は、プロセスを共有している身近なアドバイザーに率直にアドバイスを求めた。

(10) ステップ10：小さなチャレンジで具体的に動き、達成感・成功感を共有する。

まちづくりミーティングで整理された地域の活動課題の中から、メンバーが今すぐできそうな小さな地域イベントをともに設定し、いつまでに誰が何をどうするかを具体的にサポートし、ともに動くことで達成感・成功感を共有した。

V．考察

ヘルスプロモーションの市内波及というスタートラインは、"やらなければならない"という重圧を保健師にもたらしたが、保健師の活動体制の環境に加え、従来活動の経験に基づく"やっていけそう感"を持つことで地域介入の一歩を踏み出すことができた。また、地区診断によって地域資源や地域の良さを見直し、市民の熱い志に直に触れていくことで、保健師は新たな地域への介入を後押しされた。さらに、市内波及の活動時期であるからこそ、保健師間でも地域情報の交換が可能となったが、他地域を知ることで介入地域の特性をさらに実感し、地域の市民と共に歩むという確信に基づく介入を進めることができた。

口述9

碇ヶ関村における痴呆予防「頭の体操教室」～協同による痴呆予防教室の効果～

野呂真喜子[1)]　白戸　厳亮[1)]　成田むつ子[2)]

1）碇ヶ関村役場

2）三戸地方健康福祉こどもセンター八戸保健所

Key Words：①痴呆予防　②対象にあった実施方法　③評価

I．はじめに

碇ヶ関村の高齢人口は、平成15年4月現在で1021人、高齢化率30.1％であり、年々進む高齢化に伴い痴呆高齢者も増えており、平成15年度介護保険認定者のうち約66％に痴呆症状が認められる状況にある。これまで、痴呆高齢者対策が課題とされてはいたが、具体的な事業実施にはいたらなかった。そこで、健康福祉こどもセンターと協同で、痴呆を初期段階でくい止め、明るく元気に社会生活を送ることができることを目的に、痴呆予防教室「頭の体操教室」を実施したので報告する。

II．研究方法

1．教室立ち上げまでの経過

1）実施方法

教室は、軽度痴呆を対象とした、脳機能活性訓練施設高齢者リフレッシュセンタースリーA方式